

Title	C・メンガーの「欲望」概念をめぐる一考察： カント『実践理性批判』と関わらしめて
Sub Title	Carl Menger's Das Bedürfnis
Author	武藤, 功
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.3 (1989. 10) ,p.644(232)- 659(247)
JaLC DOI	10.14991/001.19891001-0232
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19891001-0232">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19891001-0232</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

# C・メンガーの「欲望」概念をめぐる一考察

——カント『実践理性批判』と関わらしめて——

武 藤 功

- 1 問題設定
- 2 研究史およびその問題点
- 3 カント批判哲学の根本問題
- 4 「究極的かつ一般的原因」＝「本質」としての「欲望」
- 5 メンガーの「欲望」概念の「実践」哲学的性格
- 6 結びに代えて

## 1 問題設定

本稿は、カール・メンガー(Carl Menger, 1840-1921)の経済学方法論の性格——とりわけ、その「本質」主義的性格——を<sup>(1)</sup>検討する。筆者は、すでに前稿においてこれをカント(I.Kant)の『実践理性批判』<sup>(2)</sup>と関わらしめて、簡単にはあるが触れておいた。本稿では、この問題に関してより深く検討を加え、より一歩突っこんだ<sup>(3)</sup>読解を示したいと考えている。

ここに、『実践理性批判』に関わらしめるとは、カントの精神界の实在の把握の思考様式及びそれにもとづく対象界の認識の仕方(ここで

は、カッシーラー流の「関係概念」を用いる)、そしてメンガーが「経済」の究極的な出発点を「欲望」を覚える人間本性であるとしたその形而上学的確信の背景の問題に限定され、必ずしも、道徳律との関係を問うことが主要な問題であることを意味しない。メンガーが、明示的に示した稀少性定義は、目的がいかなるものであれ、諸目的と代替的用途を有するもろもろの稀少な手段との間の関係が存するところに、経済が存することを述べているのであって、その目的が道徳的に是認されるか否かは、問わないからである。しかしながら、メンガーの経済学の中に「実践」哲学的性格を示唆する論者も少なくはないので、最後の節において幾分補論的にではあるが、この問題を扱っておくことにしたい。

メンガーの理論的認識については、すでに前稿において、それを叙述したときに十分な論述を施しておいたので、ここで改めて詳細に展開する必要はないであろう。メンガーによれば、理論的研究は二つの異なる研究方針に分類する

- 注(1) 武藤功「メンガー『国民経済学原理』の哲学的基礎」『三田学会雑誌』81巻4号(1989年1月)。
- (2) I. Kant [17] 尚、本稿における引用文は基本的に邦訳書によっているが、訳文・表記などは必ずしも忠実に従っているわけではない。この点は、本稿に引用されるすべての文献について同様であることを、あらかじめ断っておく。
- (3) 本稿に対してあり得べき批判を回避するために、あらかじめ次の点はお断わりしておくのがよいであろう。それは本稿が、経済哲学ないしは経済学方法論を主題としたものであって、経済学史の論文ではないということである。従って、メンガーとカントとの交渉を、歴史的に考証するという問題は、関心の領域外に存する。むしろ、筆者の関心は、認識論的に先験的構成説的概念構成が経済学に有するはずの意義と限界とを示すために、メンガーを一つの材料として研究することに存するのである。そのことはまた、筆者とメンガーとが一体となって、カントを読むという図式で捉えることもできよう。

ことができるという。その一つは、「現実的—経験主義的研究方針」(die realistisch-empirische Richtung)であり、他の一つは、「精密的研究方針」(die exakte Richtung)である。そして、精密的研究方針こそが、メンガーが<sup>(4)</sup>1871年に世に送り出した主著『国民経済学原理』(以下、『原理』と略記する)で追求したものにほかならない。それは、次のようなものである。

「現象の厳密な法則を確立すること、すなわち、ただ単に例外のないものとして現れるばかりでなく、われわれの認識通路の点からしてまさに例外のないことの保証を内包している、現象継起のなかでの規則性、一般に『自然法則』と呼ばれているが、『精密法則』と呼んだ方がふさわしい現象の法則を確立することを目指す研究方針である。<sup>(5)</sup>」

そして、精密法則は以下のような過程を通じて獲得されるという。まず、人間経済の複雑な現象をもっとも単純な、部分的には非経験的な要素に還元する。それはあらゆる経済現象の根底にある「究極的かつ一般的な原因」(これこそメンガーが「本質」(*Das Wesen*)と呼んだものにほかならない)を析出することでもある(メンガーはこの過程を「分析的方法」と呼んでいる)。そして今度は、この要素から複雑な個々の経済現象の派生する経緯を、因果の連鎖として解明するのである(メンガーはこの過程を「総合的」あるいは「構成的」方法とよんでいる)。

こうして獲得される精密的理論は、メンガーによれば、「いつもすべての現象のただ一定の側面だけを、それぞれのやり方でわれわれに理解させることを課題とする」<sup>(6)</sup>ものである。メンガ

ーが、「理解」というとき、それがカントの認識論(『純粹理性批判』<sup>(7)</sup>)と論理的関連を有することは、すでに明らかにしておいた。

われわれは、こうしたメンガーの精密的理論を仮說的認識として理解することができる。しかしながら、メンガーは経験主義的なそれとは距離をおく、いやむしろ批判的でさえある。

経験主義的な科学方法論では、仮説として承認された前提から、一定の推論を経て「経験的」と考えられる帰結を導く。その際、一定の推論を下す際の出発点となる前提は与えられたものとみなして、その仮説的前提が現実的に満たされているかどうかは問わない。したがって、自然科学においてもわれわれが「力」と呼ぶものを、ともかく運動の既知の大きさを表す分析的表現として承認する。これと同様に、形而上学の間い尋ねる「本質」も、決して探求の発端ではありえないのである。

それに反してメンガーの方法論は、すべての経済現象を、単一の「究極的かつ一般的な原因」に還元し、そこからすべての経済現象が生起すると考える一元的な因果論の構造を有している。そしてさらに、メンガーにとって「究極的かつ一般的な原因」は単なる暫定的な仮説の地位にとどまるものとしてではなく、ある意味での實在論的性格を有するものとして考えられている。この辺の事情は、メンガーがワルラスに宛てた書簡<sup>(8)</sup>のなかで端的に表明されている。

「いわゆる純粹経済学の従わなければならない方法は、単に数学的と呼ばれるものでもなく、単に合理的と呼ばれるものでもないのです。われわれは経済現象の量的関係のみならず、その本質をも研究しなければならない

注(4) C. Menger [30]

(5) Ibid., S. 38 同邦訳書48頁。

(6) Ibid., S. 52 同邦訳書58頁。

(7) I. Kant [16] 尚、『純粹理性批判』の原頁を示す場合は慣例に従い、第一版はA～、第二版はB～の形で示した。

(8) ワルラス宛書簡 1884年2月某日付 W. Jaffé [15] 所収 Letter 602.

のです。しかしこの究極的なもの——例えば、価値・地代・企業者利潤・分業・複本位制などの本質——に関する認識にいかにか数学的方法によって到達するのでしょうか。」「おそろく以下のようにすることが不可避なのであります。……非常に複雑な現象を、最も単純な要素にまで遡ることです。それ故、われわれは分析的な方法によって価格現象の究極的な構成要素を確定しなければならないのであります。それから、それらの要素にふさわしい測度を当て、今度はこれらの究極的なものの把握を通じて単純な要素から、人間の交易の複雑な現象の法則を確定するのであります。」

そして、経済現象の「本質」を研究するために分析的な方法によって確定された「究極的かつ一般的な原因」は、實在論的な性格を有するものであって、

「分析の方法によっても、事実に対応しないような要素に行きついてしまったり、あるいは固有の分析なしに、勝手な公理から出発する研究者は、必ず誤謬に陥る」

と述べている。

何を仮説として承認するか、何を「本質」と考えるかは、すぐれて哲学的な問いである。それは、科学以前の（非科学的な）形而上学の領域に属する問いではあるが、われわれはメンガーに即してそれを問わなければならない。なぜなら、それを問うことが、メンガーの経済学方法論の特徴を明らかにする重要な鍵を握っていると思われるからである。そればかりではなく、後の論述が示すように、その問いの解答が、カントの「統整的原理」としての「理念」と結びつくことが理解されるならば、それはより積極的に経済学方法論一般にとっても、先験的構成論的な理論構成の性格を浮き彫りにするという

点で、その意義は決して少なくないと考えるのである。

メンガーの『原理』においては、人間の「欲望」(Bedürfniss)が経済学の出発点であり、彼が「究極的かつ一般的な原因」というものを具体的に『原理』の中に探し求めようとするならば、やはり人間の「欲望」にはほかならないことに気がつく。そして、メンガーが「欲望」を覚える人間本性を「本質」というとき、メンガーは人間を二重の仕方では把握しているといえる。一方では、大なる世界連関の自然必然性に従う主体としてである。メンガーは、次のように述べている。

「あらゆる物は、因果の法則に支配されている。……(中略)……われわれ自身の人格及び一切の状態もまたこの大なる世界連関の一環であり、従って一の状態からこれとは異なる他の状態へのわれわれ人間の移行は、因果の法則に従うものとしてより外には考えることができない。」<sup>(9)</sup>

他方では、人間を実体の根源的概念として把握している。メンガーが、「欲望」を覚える人間本性を「本質」としてそれに實在論的性格を帰しているのは、この意味においてである。

この場合、各人は思惟の自発的活動において、現象体をこえた<sup>(10)</sup>叡智者として自己を意識しているはずである。現象に関しても、相対的な意味においては実体的なものを認めることはできる。しかし、現象としての実体の実質は「純然たる<sup>(11)</sup>関係だけの<sup>(12)</sup>総括」にすぎない。メンガーは、人間をそのようなもの（単なる物件）とみなすことに満足していない。メンガーが、「欲望」を覚える人間本性を「本質」とするとき、それはカントの実体概念の「実践的使用」と同一の地平に立つものと思われる。かくして、われわれは再びカントとともに歩むことになる。カントは、

注(9) C. Menger [30] S. 1 同邦訳書1頁。

(10) カントの叡智者は悟性界と同義で、物自体としての人間はこれに帰属すべきものと考えられている。

(11) I. Kant [16]『純粋理性批判』B321。

統覚における自己意識に即して、自己を「存在者自身」であるとし、自己意識に基づいて「実在としてではないが理念としての実体」<sup>(13)</sup>を定立することは可能であるとしている。

このことは、メンガーによって明示的に述べられた稀少性定義の含意するところのものと同連させて、なお論点を明確にしうらと思われる。稀少性定義の示す経済なる概念は、「諸目的と代替的用途を有する諸々の稀少な手段との間の関係としての人間行動」として規定されるものである。ここでは、経済なる概念は、ある客体そのものに固定的な絶対的屬性ではなく、ものと人間との間の一定の関係として規定されるものである。この人間ともとの関係は、対象化され同次元におかれたものとして見られる対象的關係として考えられているのではない。ここでは人間ともとの関係が、そのものにおいてある人間の内省的意識によって把握されるものである。かかる認識においては、人間は単に見られるものとしてではなく、自己の意識を意識する存在として、自覚的な存在としてあるのである。メンガーは、この自己の意識を意識する自覚的存在こそ、あらゆる経済現象の「本質」としたのである。

メンガーは、カントとともに対象界の実体概念を破壊し、それを純粹悟性概念の中に、関係のカテゴリーの一つとして埋め込む。これによって現象における秩序は、専ら認識主体の主観的概念の中に位置づけられることになる。しかしながら、対象界の実体概念が観念の中に還元

されたとしても、依然として、人間の常住不変性、思惟する自我にあっては自我の精神は実体でありつづけた。かくして、方法論的個人主義は、究極的な存在論的基礎として、実体概念を承認する。そしてそれはまた、カントの実体概念の「実践的使用」でもある。

## 2 研究史およびその問題点

本節では、メンガーの方法論に関して、これまでの先達の研究に触れておきたい。メンガーの方法論に関してはいくつかの解釈があるが、ここではメンガーをアリストテレスと結びつけて解釈する立場と、メンガーをカントと結びつけて解釈する立場に絞って検討していきたい。両者の相違は、着目する観点の違いにもとづいていると思われる。

メンガーを、アリストテレス的に解釈する論者は、ハチソン (T. W. Hutchison) やカウダー (E. Kauder) らに代表されるが、彼らは、メンガーの「本質」主義的な側面に着目し、それとアリストテレスの哲学との類似性を強調する<sup>(14)</sup>。確かに「本質」をめぐる問題は、哲学のもっとも古く、もっとも根本的な問いの一つであり、それはプラトン＝アリストテレスの哲学に根差しているといえることができる。また彼らは、その論証において基本的に、ポパー (K. R. Popper)<sup>(15)</sup>が『歴史主義《Historicism》の貧困』の中で定式化した「方法論的本質主義」(methodological essentialism)<sup>(16)</sup>を援用している。

注(12) 前稿においても説明しておいたように、17世紀まで守られてきたアリストテレスを代表とする「実体概念」は、カントによって純粹悟性概念の中に、関係のカテゴリーの一つとして埋めこまれる。このカントの思考様式とメンガーの思考様式との符合をみてとるのはきわめて容易である。たとえば、「財性質が決して財に付着せるもの、その属性ではなくてたんに或る物と人間との一つの関係 (Beziehung)、それが消滅すればこの物ももちろん財たることを止める如き一つの関係として現れるにすぎない」と述べている。(『原理』S.3 同邦訳書6頁)

(13) I. Kant [16]『純粹理性批判』A351.

(14) 先駆的には、クラウスが、ブレンダーノの解釈したアリストテレスの『トピカ』とメンガーとの間の類似性を指摘したが、今回はこれを利用しなかった。

Oskar Kraus "Die aristotelische Werttheorie in ihren Beziehungen zu den Lehren der modernen Psychologenschule" Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 61 (1905) 573-592.

ポパーは、普遍名辞の性格をめぐる中世の普遍論争から、「本質」をめぐる形而上学的論点を、科学的方法の問題に定式化し直し、整理している。一方の側の主張は、唯名論の側の説であり、この党派にとっては、普遍名辞は、多くの事物の集合につけられたレッテル以外の何ものでもない、とされる。

これに反対したのが、伝統的に「実念論」（あるいは「実在論」と呼ばれる主張であり、ポパーはこの反唯名論的主張を「本質主義」と命名しなおす。この党派にとっては、普遍名辞は普遍の対象を指示するものであり、その普遍の対象は「実際に」存在する、と主張する。本質主義者は、例えばわれわれが単一の「白い」事物をそれぞれ「白い」と呼ぶのは、それぞれが他の白い事物と共有しているある本質的な性質、すなわち「白い」という普遍の対象によってである、という。そして、普遍名辞によって指示されるその普遍の対象（プラトンはそれを「形相」あるいは「イデア」と呼んだ）が、また「本質」とも呼ばれた。さらに、本質主義者は、普遍の対象の存在を信じるばかりではなく、また科学におけるその重要性、すなわち事物の示す偶然性をとり去って、事物の本質に迫ることを力説する。そして、このアリストテレスによって創建された思想学派を「方法論的本質主義」と呼ぶことをポパーは提案している。

メンガーの狙いは、社会に生起する諸々の事象を究極において統制し、それらを経済現象たらしめている、何か本質的なものの実在を、確信し、探ろうとすることであった、という点では方法論的本質主義と共通の思想が含まれているということは可能である。

しかし、メンガーをアリストテレスと結びつける論者の主張には、若干の問題点が含まれていると思われる。

これらの論者は、メンガーの強調する「本質」

という字句にとらわれすぎて、その「本質」が『原理』の中で具体的には何であるのか、を必ずしも明確にしていないということである。

メンガーのいう「本質」は、あらゆる複雑な経済現象を生起せしめる「究極のかつ一般的な原因」であり、あらゆる経済現象をそこからの因果の連鎖として解明するという意味で、精密法則の出発点に据えられるものである。そして、それはメンガーの『原理』を虚心坦懐に読むことを試みるならば、それは「欲望」を覚える人間本性よりほかに見いだすことはできない。

メンガーにあっては対象界の実体概念は破壊され、現象における秩序が、専ら認識主体の主観的概念のうちに位置づけられている。メンガーは対象界の実体概念を観念の中に還元し、関係的思惟にもとづいてのみ、それを把握する。「財とは何か」「価値とは何か」といった定式の解答も、メンガーは、それを対象界の背後に確信された形而上学的なある実体に求めるのではなく、それを人間の観念の中に引き込んできて、現象の秩序をその主観的概念のうちに関係的思惟にもとづいてのみ位置づける点で、「方法論的本質主義」とは表面的な類縁性しか存しない<sup>(17)</sup>と言ってよい。

他方、メンガーの方法論の性格をカントと結びつける立場は、多くの場合、メンガーの精密法則の論理的性格を考察し、それとカントの認識論との論理的整合性を強調する。そしてこれについては、筆者自身の前稿もこのことの論証にあてられているので、多くを語る必要はないであろう。ただし、これらの論者についても同様に若干の問題点を指摘することができる。それは、これらの論者は、もっぱらメンガーの精密法則の論理的性格を問題にするにとどまり、メンガーの「本質」の哲学的な基礎づけについては、これを問うという姿勢に欠けているということである。メンガーの精密法則が認識論的

注 (15) K. R. Popper [33].

(16) たとえば、T. W. Hutchison [13] などを参照されたい。

(17) 前稿、とりわけ第6章を参照されたい。

には、確かにカントと同一の地平に立つとしても、メンガーが究極的には承認した実体概念が、存在論的にもはたしてカントの批判哲学に論理的関連を有するの否か、という重要な問いは依然として残されたままである。そして、本稿の目的はこの方向にささやかな歩を進めることである。

あるいはまた、メンガーの有する認識論的および存在論的側面を、カントとアリストテレスとの哲学の折衷をもって解釈する丸山徹のような立場もありえようが、それは同時に、両者の根本的主張がいかなる原理によって整合的に折衷されうるのか、という複雑な論点を孕む問題を提起することにもなる、ということを知らねばならない。

### 3 カント批判哲学の根本問題

カントの批判哲学は、形而上学の概念から、そしてこの概念の全歴史を通じて蒙った運命から始められる。従来の形而上学は、「存在論」であった。それらは根本的に「経験論」的立場にあっても、「合理論」的立場にあっても、なるほど存在を取得する特殊な認識手段に関しては見解を異にするが、精神が受容し「模写」しなければならぬ「存在」が現在する、という根本の見解については両者は一致する。

これらの「存在論」は、カントによって純粹悟性の単なる分析論に席を譲る。『純粹理性批判』によって新たに考察されねばならないのは、形而上学の対象ではなく、存在一般への問いが何を意味するのかを、まず説明することである。こうした従来の形而上学的問題に対して、カントの学説の自覚する対立点に関しては、『純粹理性批判』第二版の序文のなかで印象的に述べられている。

「われわれはこれまで、われわれの認識はすべて対象にしたがって規定されねばならない

と考えていた。しかしわれわれがこのような対象に関して何ごとかをア・プリオリに概念によって規定し、こうしてわれわれの認識を拡張しようとする試みは、かかる前提のもとではすべて潰えさったのである。そこで今度は、対象がわれわれの認識に従って規定されねばならないというふうに想定したら、形而上学のいろいろな課題がもっとうまく解決されはしないかどうかを、ひとつ試してみたらどうだろう。形而上学では、ア・プリオリな認識、つまり対象がわれわれにあたえられる前に対象について何ごとかを決定するような認識の可能性が要求されている、ところがいま述べた想定はすでにそれだけで、かかる認識の可能性ともずっとよく一致するのである。この事情は、コペルニクスの主要な思想とまったく同じことになる。コペルニクスは、すべての天体が観察者の周囲を運行するというふうに想定すると、天体の運動の説明がなかなかうまく運ばなかったので、今度は天体を静止させ、その周囲を観察者に廻らせたのもっとうまくいきはしないかと思って、このことを試みたのである。<sup>(19)</sup>」

カントが後に「思考法の革命」と名付け、認識問題の「コペルニクス的」転回と名付けたものは、対象概念を考察し、そのものの意味や内容を問い、「客観性」への要求が意味するものを問うことである。こうして「形而上学」はカントが『純粹理性批判』において厳密に規定した意味での「超越論的哲学」へと転じることになる。

「私が超越論的と名付けるものは、対象に携わるのではなく、対象一般についてのわれわれの認識の仕方に、その認識の仕方がア・プリオリに可能であるべき限りにおいて、携わるような、すべての認識<sup>(20)</sup>である。」

注 (18) 丸山徹 [23] 291-305頁参照。

(19) I. Kant [16] B XVI-XVII.

ここから、学の真の構築が透視される。「超越論的」(das Transzendente)な考察の観点から「主観性」の意味するものは、端的に「コペルニクス的転回」が言い表しているものにほかならない。主観性は認識が対象からではなく、特殊な法則性から発することを意味する。対象性の一定の形式は、(それが理論的であれ、倫理的であれ)この法則性へと還元されねばならない。このことが十分に理解されるならば、「主観性」の恣意的なものといった副次的意味は直ちに消滅する。

「超越論的」及び「主観性」という根本的概念と並んで、さらに「ア・プリオリな総合」という、カントの批判哲学にとって核心的な主要概念が現れる。<sup>(21)</sup>

カントはまず「理論理性の批判」を通じて、理論理性を、受動的に直観を形成する「感性」と、能動的に純粹概念を発動する「悟性」とに分ち、理論的認識はそれらの「総合」によって構成されるとする。

しかしこうした理論的認識は、つねに「感性」の制約を免れえない(それは不断に物自体により触発されねばならない)かぎり、完全な統一的認識に至ることはなく、その統一の指標は超感性的なものに求めねばならない。カントは、「理論理性の批判」の終局において、理論的認識の向かうべき指標としての超感性的なものを、論理的推理の結果として導出せざるをえず、それを「理念」と称した。この「理念」は、感性的直観を超越しているが故に、理論理性の立場からは承認されることのない「仮象」であるが、それにもかかわらずそれは純粹理性の拒もうとして拒みきれないものとされる。

そこでカントは「実践理性一般」の批判を通じて「純粹実践理性」の存在を確証し、純粹理性はその「実践的使用」の名のもとに、この「仮象」を「先験的仮象」として肯定し、そしてさらに「先験的理念」<sup>(22)</sup>として積極的に承認するに至るのである。

『実践理性批判』によって、批判的倫理学が構築されるが、それはカントの哲学的体系が彼によって抱かれた最初の契機からすでに本質的にして不可欠な構成要素をなしていた。すでに『純粹理性批判』第一版の序文冒頭で、次のように述べていたことが思い出されねばならない。

「人間の理性は、ある種の認識について特殊な運命を担っている、即ち理性が斥けることもできず、さりとて答えることもできないような問題に悩まされるという運命である。斥けることができないというのは、これらの問題が理性の自然的本性によって理性にかせられているからである。また答えることができないというのは、かかる問題が人間理性の一切の能力を超えているからである。」<sup>(23)</sup>

引用文中、「答えることができない」とは、理論理性にもとづいて理論的に「答えることができない」という意味であることは、もちろんである。

理性のかかる実践的能力とともに、こんどは先験的自由<sup>(24)</sup>が確立される。

しかも「先験的自由は理性自体が感性界を規定するいっさいの原因にかかわりのないことを要求する」(『純粹理性批判』A 831)という意味で、この自由が絶対的の意味において確立されるのである。

注 (20) Ibid., 序論 VII, B 25.

(21) 理論的な意味における「ア・プリオリな総合」については、前稿を参照されたい。

(22) 「理念は、経験的認識における多様なものに体系的統一を与えるための統整的原理である。」(『純粹理性批判』A 699)。

(23) I. Kant [16] A. I.

(24) 「自由とは、或る状態をみずから始める能力であるから、自由の原因性は、自然法則によって時間的に規定されるような原因性ではない、かかる意味では、自由は先験的理念である。」(『純粹理性批判』A 561)。



カントは、先験的自由の概念を二重の意味で用いている。一方では実践的自由の概念をうちこふくんだものとして、あるいはその基礎として用いている。

他方で、<sup>(25)</sup> 純粹に宇宙論的意味における自由は、自然必然性<sup>(26)</sup>と対立させることによるのみ特徴づけられている。カントはこの意味において、「理性的存在者、あるいは一般にその原因性が、<sup>(27)</sup> 物自体としてのそれらにおいて規定される存在者には、一連の自らはじめる能力を、自然法則と矛盾することなく、<sup>(27)</sup> 考えることができる」と確言している。

#### 4 「究極的かつ一般的原因」=「本質」 としての「欲望」

本節では、メンガーの「欲望」の概念を、カントの『実践理性批判』と関わらしめて、具体的に読解していくことにする。

メンガーは、『原理』初版では「欲望」について僅かに次のような言明をしているにすぎない。すなわち、

「欲望はわれわれの衝動に由来し、衝動はわれわれの本性に根ざしている。欲望の不満足はわれわれの本性の破壊を、その不十分な満足はその本性の萎縮をもたらすものである。欲望を満足するとは、生きかつ栄えることを意味している。それ故われわれの欲望満足に対する配慮はわれわれの生命、われわれの福祉に対する配慮と同義である。この配慮はあらゆる人間の努力のうち最も重要なものであ

る。なぜならそれは<sup>(28)</sup> 残余一切の努力の前提であり基礎である。」と。

メンガーは、『原理』初版において「欲望」それ自体の具体的内容を論じてはいない。それは経済行為が、主体の「欲望」満足に向けられた先慮的行為である以上、経済理論は「欲望」を前提とはしているが、それは「欲望」それ自体の具体的内容を論じることを必要とはしない、というメンガーの態度決定によるものである。メンガーは、このあたりの事情を次のように了解している。すなわち、『原理』初版の序文で次のようにのべている。

「理論国民経済学は、経済的行為に対する実際の提案を取り扱うのではなく、人間が欲望満足に向けられた先慮的行為を展開するにあたって、その基底となる諸条件を取り扱うのである」<sup>(29)</sup>

メンガーの精密的理論が、カントの認識論と論理的関連を有するとすれば、理性の理論的使用においては、経験的認識における多様なものに全体的統一性を与えるような究極的な根拠は決して明らかにされえない。

「現象としての物の原因のなかには、絶対的に無条件的であるような原因性による規定は<sup>(30)</sup> ありえない」

のである。

すでにみたように、メンガーは、われわれ自身を大なる世界連関の自然必然性に従う主体と見ている。それ故、われわれ人間が「欲望」するという状態から「欲望」満足の状態へと進も

注 (25) 「宇宙論的意味において自由とは、或る状態をみずから始める能力であるから、自由の原因性は自然法則によって時間的に規定されるような原因性ではない。かかる意味では自由は一つの先験的理念である。」(『純粹理性批判』A561)

(26) 原因性 (Kausalität) は、因果性とも訳される。「原因性は原因がそこではたらくところの状態を意味する」(『プロレゴメナ』第53節)。

(27) I. Kant『プロレゴメナ』第53節。

(28) C. Menger [30] S. 32, 同邦訳書30頁。

(29) Ibid., S. IX, 同邦訳書序言5頁。

(30) I. Kant [17] 同邦訳書109頁。

うとするならば、そのためには十分な原因が存在しなければならない。メンガーの『原理』初版における態度決定は、人間の「欲望」を前提として、その満足に向けられた行為を展開する際の、外的な因果過程のみを取り扱うというものである。その意味で、メンガーの『原理』初版は、カントの『純粹理性批判』の域を出ていない。実際、カントによれば、理性の理論的使用が純粹悟性概念に従って判定すべき事柄は、感性界の出来事としての行為の可能性なのである。

「理論理性は、この原因性に対する図式<sup>(31)</sup>を感性的直観のうちに見いだすのである。自然の原因性は、行為を生起せしめるための条件<sup>(32)</sup>である。」

カントは、意志そのものの具体的な規定根拠をではなく、もしそれが規定されたとしたとき、それにもとづく行為の感性界における可能性の条件を明らかにすることが、理論理性の権能である、としている。このカントの言句と、先のメンガーの『原理』初版の序文にみられた態度決定の表明とが、基本的に符合していることは容易にみてとれよう。

したがって、もしメンガーが、「究極的かつ一般的な原因」＝「欲望」そのものの規定根拠を、問題にしようとするれば、それはその原因性の概念を自然法則に従う自然的連結を成立せしめる条件とはまったく異なる条件に結びつけられねばならないのである。

かくして、経験的認識における多様なものに

<sup>(33)</sup> 全体的統一性を与える統整的原理あるいは「究極的かつ一般的な原因」は、自然法則（因果系列）に従う自然的連結の外部に、他のいかなるものによってではなく、「自己原因」としてそれ自体によって規定される、そうした原因性のうちに見いだされねばならないことになる。この原因性の、客観としての対象は、感性的世界のうちに決して見いだせないから、理論理性の権能（『純粹理性批判』の世界）を超越するものである。しかし、このことは理性の拒もうとして拒みきれない理性の本源的な「要請」にもとづくものとされる。

かくして、われわれは今や、カントが理論理性の批判を通じて、その「超越」を積極的に肯定するに至る『実践理性批判』の世界へと移行しなければならない。

その前にしばらく、メンガーの死後、子息の手によって膨大、断片的な遺稿が整理されて出版された『原理』第二版の冒頭に新たに追加された「『欲望』の理論」に簡単に触れておくことにしたい。

メンガーにとって、人間の「欲望」は、「究極的かつ一般的な原因」＝「本質」であった。したがって、メンガーが初版公刊後の方法論的反省の時期を経て、『『欲望』の理論』を新たに追加したことは、「欲望」自体の具体的内容を論じるばかりではなく、それが一定の推論の結論を導く際の出発点となる前提として、妥当性をもつかどうか、またなぜそうであらねばならぬのか、という問いと深く結びついているこ

注(31) 「図式は、構想力の所産にはかならない、しかし形像そのものではなくて、構想力が悟性概念に形像を与える一般的方法の表象である。」（『純粹理性批判』B179）。

「図式は、ほんらい現象である、すなわちそれは或る対象の感性化された概念であって、しかもカテゴリーと合致するものである。」（『純粹理性批判』B186）。

例えば、特定の三角形に関する知識を得る場合に、予め純粹直観にもとづく幾何学的図形としての「三角形」という形式を通してもつところの、三角形一般の表象のことであり、三角形という点でそれと同種性をもつ特定の感官の対象が与えられると、この「図式」がその特定の三角形に適用される。

(32) I. Kant [17]（『実践理性批判』同邦訳書146頁）。

(33) 「純粹理性の統整的原理は、経験的認識を構成する原理ではなくて」（『純粹理性批判』B537）「経験的認識一般における多様なものを、体系的に統一する原理である」（同上・B699）「理念は、経験的認識における多様なものに体系的統一を与えるための統整性原理である」（同上・B699）。

とを予想させるはずである。メンガーが、「欲望」の具体的内容を深く論じようとし、「理論国民経済学は、人間が欲望の満足に向けられた先慮的行為を展開するにあたって、その基底となる諸条件を取り扱う」という『原理』初版の序文を、『原理』改訂のために用意した稿本（一橋大学蔵）では削除していることも、そのような問いに答えようとしたものと解することができる。

しかしながら、このような問いに答えること自体は、一つの非科学的（形而上学的）な態度決定に関するものと言わねばならない。その点で、メンガーが、「欲望」の本質と理解とは「自然科学特に生物学から精神科学特に経済学に導く橋」<sup>(34)</sup>と述べているのは、理解しかねる問題点を含んでいるように、私には思われる。

メンガーは『原理』第二版の「『欲望』の理論」において、「欲動」(Trieb) 及び「欲情」<sup>(35)</sup>(Begierde)との関連で「欲望」を説明している。しかも、「欲望」を、欲動及び欲情という生活現象の発展として把握している。

メンガーによれば、「人間の『欲望』は恣意の所産ではなく、われわれの本性とわれわれをとりまく事態<sup>(36)</sup>によって与えられるものである」という。

メンガーの「欲望」は、人間の本性と、それをとりまく環境によって客観的に決定されるものである。メンガーはさらに、人間の「欲望」を有機体の「欲望」から、生理学的・生物学的に説明している。メンガーによれば、「有機体に固有の本性とその正常な発展にとっての必要

事という意味での『欲望』はすべての生命過程、ことに新陳代謝の随伴現象として、あらゆる有機体において観察されうる。<sup>(37)</sup>」という。われわれの「欲望」は、他の有機体とは比べものにならないほど遙かに豊かに発展しており発展能力があり、またわれわれはそれを十分に認識することができる。しかし、人間の「欲望」と他の有機体のそれとのあいだに本質的な差異は存在しない、という。

したがって、

「どんな動物にも観察されえないような意識現象が（人間に）あるとしても、だからこそそれはその（動物の自己関心の）より高度の発展あるいは複雑化であるとみなせるのである。」<sup>(38)</sup>

しかしながら、こうしたメンガーの言明は、何故、人間の「欲望」が一元的に経済学の究極的な基礎であり、「本質」であらねばならないのかということに、十分答えたことになるのであるだろうか。私には否定的に答えるしかないように思われる。なぜなら、メンガーが人間の「欲望」を、人間本性とそれをとりまく事態とによって客観的に決定されるものであるとし、それ故にわれわれの認識対象となりうるというとき、それはいわば形而上学的な態度決定の問題を、経験的知識の問題へと還元しているからであり、そのことは先の問いに対して何ら解答を与えるものではなく、むしろ問題は反復されるのみであるからである。<sup>(39)</sup>

したがって、本稿では、『原理』第二版が子

注 (34) C. Menger [30] 2. Aufl. S. 1, 同邦訳書1頁。

(35) 「欲動とは、不快感やわれわれの内的調和の障害を通じてわれわれの意識にまで到達している・われわれの心理の一体的本性のすでに存在しているか発現寸前の障害を廃棄して、内的な調和状態に戻り、無意識的ながら間接的に、われわれの自然な状態と自然な発展とに復帰しようとする衝動なのである。」

また、欲情とは「われわれの欲動を和らげるために役立つとみなされる物を自分のものにして、これらの物をして自分に影響を与えさせようとする衝動のことである。」Ibid., S. 2, 同邦訳書28-29頁。

(36) Ibid., S. 4, 同邦訳書31頁。

(37) Ibid., S. 6, 同邦訳書33頁。

(38) Ibid., S. 6, 同邦訳書34頁。

息の手による出版という事情によって自ずから画される限界をも十分に鑑みて、『原理』初版に散見する「欲望」の概念を中心として、それとカントの『実践理性批判』との対応を論じることとする。『原理』第二版の「『欲望』の理論」は、初版における叙述を基本的に敷衍しているにすぎないと判断されるものに限って言及するにとどめる。

## 5 メンガーの「欲望」概念の「実践」哲学的性格

われわれは、例えばジェヴォンズ (W. S. Jevons) やエッジワース (F. Y. Edgeworth) などの経済学において、快楽と苦痛に関する心理学上の快楽主義ないしは功利主義を明瞭に見出すことができる。しかし、メンガーの『原理』においては、これらの心理学上の快楽主義ないしは功利主義は、前提されていないと言い得る。むしろ、杉村広蔵の言うように、メンガーは「経済そのものの内面的価値とか本来の意義と

<sup>(40)</sup>かいうものを前提」していたということも可能であろう。メンガーの「欲望」とその満足に向けられた先慮的行為は、行為の成果を顧慮して、その行為を規定するのではなく、人間の「欲望」は、「欲望」を満足させる外的な可能性とは独立して自己を主張するものであり、それによって人間は経済的行為へと促されるのである。人間の「欲望」は、生命及び福祉の増進に対する配慮であり、人間はそれに促されて、「欲望」を満足させるべく経済的行為を展開する。

いうまでもなく、「欲望」満足の実現は、外的事態に依存しているが、人間の「欲望」は外的事態の如何に関わりなく、それ自体として存在するものである。人間が「欲望」を覚える状態から「欲望」満足の状態に進むには、それに適した財を確保するか、あるいはそれに適した外物が存在しない場合には、「われわれの身体の中に働いている諸々の力がわれわれの攪乱状態を除去する」<sup>(41)</sup>かであるという。後者の道は、われわれの肉体的、精神的個性の歪曲を生み出しかねないという短所をもつことはいうまでもな

注 (39) カントは、行為の主観的原理としての「格率」がどのようにして成立するに至るかを考察することが経験心理学の課題であると触れた箇所が次のように述べている。

「実践哲学においては、生起することの理由を受け取るのではなく、たとえ決して生起しなくても生起すべきことの法則すなわち客観的実践的法則を受け取ることが肝要であるから、ここで次の事柄の理由を探索することは必要ではない。何故にあるものが気に入ったり或は気に入らなかつたりするのか。単なる感覚の満足は趣味とはいかに異なるのか。また趣味は理性の普遍的称賛と異なるのかどうか。快と不快の感情は何に基づくのか。そして、それらの感情からいかにして欲動 (Begierde) と傾向性 (Neigung) とが発生し、更にいかにして欲動と傾向性とから理性の協力によって格率が成立するのか。けだし、これらすべての問いは経験的心理学に属しているからである。経験的心理学は、経験的諸法則に基づいている限りの心理学が自然の哲学とみなされるならば、自然学の第二部門を構成するであろう。」(カント『道徳形而上学原論』岩波文庫版(篠田英雄訳) 99頁。)

カントが、経験的認識の多様性に全体的統一性を与えるような究極的原理を、実践理性に求めるとき、それは端的に宗教的な感情と結びついている。確かに、どのようにしてそれが成立するかは、経験心理学に求めることができようが、重要なのはなぜそれを究極的なものとして受け入れるのかという、形而上学の領域に属する事柄なのである。この意味で、メンガーの態度には、疑問を感じざるをえないのである。

(40) 杉村広蔵 [36] 101頁。

(41) C. Menger [30] S. 1, 同邦訳書 1頁。

(42) この基本的な見解は、第二版では次のように明確に敷衍されている。

「欲望の鎮静は、満足 *Befriedigung* すなわち、諸条件の実現、充足によるか……あるいは全面的もしくは部分的な欲望の断念や (欲望のかなえられない状態に) 除々になれることによってなされる。後者にはしばしば『順応』 *Anpassung* とよばれているものが属する」C. Menger [30] 2. Aufl. S. 3, 同邦訳書31頁。

いが、「欲望」それ自体が外界からの独立性のうち求められることを表明しているものと解しうる。メンガーの「欲望」概念の背後には、実践哲学的な要請が潜んでいるものといって基本的に差し支えない。

そこでまず、「実践」概念をめぐる哲学上の簡単な整理をしておく必要がある。

アリストテレスは、広く人間の知能の所産、あらゆる学問技術を見渡しながら、そうした知能を「見ること」（＝観照・観想・研究・理論）、「行うこと」（＝行動・行為・実践）、「作ること」（＝制作・技術）の三つに大別し、これに応じて当時ありえた学問技術を三つに大別した。「見ること」が他の二つの機能から切り離されて純粋な観想知になるとき、「他の仕方ではあり得ない」必然的な対象（自然・本性）を認識する学問的知識が可能になるのであって、これこそが哲学者の関わるべき本来の仕事であるとされる。それに対して、後の二つの機能はどちらも「他の仕方でもあり得る」という性格をもつ事柄に関わっており、それらのうち「行うこと」についての知識が倫理的・実践的知恵（＝思慮）と呼ばれ、また「作ること」についての知識が技術と呼ばれるのである。こうして、アリストテレスは実践哲学を、その対象と方法とによって、理論哲学から区別される一つの自立した学科とみなした、それは、人間の行為の諸目標とそれを実現するための条件と手段とを探究するものである。理論哲学が、探究することそれ自体を目的として営まれるのに対して、実践哲学は善なる正しき行為を目標として営まれ、経験の人間どうしが理性的に一致しうる事柄を取り扱うものと考えられた。

こうした、実践哲学の概念および理論哲学との区別それ自体は、近代に至っても本質的に不変のまま保持されてきた。カントによる実践理性の基礎づけは、その理論的基礎を超越論的批判哲学の立場から徹底的に批判することを通じて遂行されるのであり、こうした伝統的傾向を

保持しながらも、内容的にはより尖鋭化したものと言い得る。

カントによれば、実践理性は自己の本性に基づく要求によって、究極の完全な目的に関して意思を規定することに関心をもつのであり、理性は意思規定の根拠を自らのうちに持つ限りで実践的であるとされる。カントの場合、意思の概念は目的の概念と不可分に結びつくことによって理性の創造的本性を表しており、この意思が立法的主体として技術と関わる局面に実践の問題が定位される。実践が人間の本性としての理性と統合されて、理論的实践という視点がとられるとき、それは端的に「人間にとっての善」から人間の存在を規定することへ向かうのである。

これは、ギリシア哲学が一般に、実践に消極的な意義しか認めず、あらゆる意味での実践を、結局は理論的観想に奉仕させる、とした立場とは明らかに逆である。

カントは「善意志」を、それが実現し、あるいは成就するものによってではなく、ただ意欲することによってのみ、即ち、それ自体として善いと規定している。このことは、普遍的原理を表象するカントの実践理性が本性的に善であることを示しており、その意味で、「決して本性的に」ではなく「習慣づけに基づいて生ずる」と規定されたアリストテレスの倫理的ないしは徳とは明らかに異なるものである。

以上の整理にもとづいて、メンガーの「欲望」概念を再び検討することにしよう。すでに述べたように、メンガーの「欲望」は外的に規定されるのではなく、外界から独立して存在するものであり、それはまた人間の本性に根差しているものであり、習慣にもとづいて生じるのではなかった。そして、理性は意思規定の根拠を自らのうちに持つのであり、この意思が、外的状況の中でそれを満足させる技術と関わる局面に経済的行為の問題が定位されるのである。その意味で、メンガーの「欲望」概念は、倫理性や

注 (43) Aristotle, *Ethica Nicomachea*, 1103 a (高田三郎訳『ニコマコス倫理学』岩波文庫(上)55-56頁)。

道徳性は極端に薄められてはいるが、それはきわめてカント的であったと結論づけられることは、もはや明白であろう。

しかしながら、八木紀一郎の次のような見解は、さらに解明しておかなければならない問題を含んでいる。それを解明することは、カントの批判的倫理学の「形式主義」的性格に関する誤解を払拭しておくことでもある。八木は、次のように述べている。

「こうした理性的欲望認識のア・プリオリな存在の仮定は、あまりにも空虚ではないか。同一個人の内面においても、欲望は多様であり、時々刻々変化するものであるから、欲望は、カント流の人格のような抽象的形式というよりは、人間の行為の具体的な内容に影響を与える実質的な原理である。したがって、むしろ、自然界に理性的欲望にいたる各段階の認識を想定し、人間においては特に欲望認識の理性化のプロセスを想定するという、いわばアリストテレス的アプローチが、問題を解決に導くと、メンガーは思いあつた<sup>(44)</sup>」と。

確かに、カント倫理学の出発点となる原理は、単に道徳的振舞いの普遍的なそしてその限り内容空虚な法式しか与えないし、この法式は、具体的な個々の場合の規定にとっては不十分なものであると非難されてきた。しかし、それにしてもカントの批判的倫理学は、「形式主義」という好都合な決まり文句によって混乱させられてきた。それでは一体、カントの倫理学は実質的な「内容」を否定してしまったのであろうか。答えは、そうではないと明言してよい。種々の色合いの相違はあるにせよ、「形式」と「内容」との統合は、カントの批判哲学に一貫してみられる態度でもある。形式的原理を理念として、行為の形式のみが規定されるが、それは決して行為を離れて行為の外にある形式ではない。行為の実現可能性は、外的環境の如何に関わって

いる。そのことは自然現象に関する因果連関についての知識と同じ性格の経験的知識によって条件づけられているのである。合理的に行為しようと思ふならば、意図に到達するためにはそれに適当な手段を知的に考慮しなければならない。知性はそれを規則として表象し、意欲はそれを当為として意識する。実践的規則の内容は直接に意欲とは関わりのない知的表象である。

パン屋へ行けばパンが買える、あるいは製粉機を考案しなければならない、という規則は、パンが食べたいという意欲とは関わりのない知的命題である。だから、カントはこの種の命題を「実践的原理ではなく『理論的原理』である」と述べ、更にこれを「技術的命題」と注釈して<sup>(45)</sup>いる。この意味で、意思是意欲と知性の統一態なのである。

人間が「欲望」の満足を目的とする経済的活動を展開しようとするならば、それはかかる目的のために支配しうる財数量や、それらの財の分離・結合についての「技術的命題」に関して知悉することが本質的な契機をなすのである。メンガーにあつても、「欲望」が単に形式的に規定されているにすぎず、実質的な「経済」はそれと、外的環境に関する理論的知識との統合を不可欠なものとするのである。その意味で「形式主義」的な側面をとらえて、内容空虚とするのは必ずしも正しくないのである。

メンガーの「欲望」概念を中心としたこれまでの私の説明が正しいとすれば、それはきわめてカント的なものであると言えらる。とすれば、メンガーが、「欲望」を覚える人間本性を「究極的かつ一般的な原因」＝「本質」であると一元的に確信しえた理由も同時に理解されらる。

カントの『実践理性批判』はきわめて宗教的な、形而上学的な領域に属するものである。そこでカントは人間を、理性の「実践的使用」にあつては、物自体（これをメンガーは「本質」と

注(44) 八木紀一郎 [44] 59頁。

(45) I. Kant [17] 同邦訳書62頁。

称していると考えてよい)の世界に属する叡知者として把握している。

したがって、メンガーのいう「本質」は、カントの意味での「理念」と密接な関係にある。カントにおいて、「理念」の要請に限っては、理性の独断的使用にもとづいており、その意味で形而上学的(非科学的)ではある。また、カントにおいて、この「理念」の認識論的な意義が必ずしも明確に述べられているわけではない。しかし、この「理念」のあるべきところの意義を、自然科学的な因果連関の認識に対する文化科学的な意味連関の「了解」と結びつけてとらえることは可能である。無論、カントに「了解」の理論はない。しかし、われわれは、新カント派を経ることによってこの道を開拓していった社会学者としてマックス・ウェーバー(M. Weber)を知っているのである。メンガーとウェーバーとの間には、個々の論点において違い<sup>(46)</sup>はあるにせよ、本稿の考察により、先験論的構成説的認識論の基本的な性格は、浮き彫りにされたはずである。

以上のことから総合して、メンガーはカントと同一の地平に立ち、「欲望」を覚える人間本性を、「本質」とし一元的な「究極的かつ一般的な原因」とする確信を得、それを経験的認識における多様なものに体系的統一を与える「統整的原理」として、そこからの構成説な合理的思惟像としての精密的理論を獲得しえたものと結論づけることができるのである。

## 6 結びに代えて

本稿は、メンガーがあらゆる人間経済の「究極的かつ一般的な原因」とし、「本質」とした人

間の「欲望」という概念の哲学的背景を探求しようとしたものである。メンガーが、ワルラスに宛てた書簡で、ワルラスを「勝手な公理から出発する」ものと批判したことからも明らかのように、メンガーの「究極的かつ一般的な原因」は単なる暫定的虚構ではなく、実在論的性格を有するものでなければならなかった。メンガーが、「欲望」を覚える人間本性を唯一の経済学の出発点であると確信しえた、そのきわめて形而上学的な態度決定に関する哲学的背景を探り出す、このことが本稿の主たる目的であった。そしてそれは、カントの『実践理性批判』に求められた。それは、まずあらゆる因果系列の統整的原理としての「自己原因」として、人間を叡智者として把握するところにおいて結び付く。叡智者は、物自体に属すると考えられるがゆえに、理念として「本質」でもありうる。そしてメンガーの「欲望」概念の背景に、実践哲学的な要請を読み取りうるとすれば、それは内容的にアリストテレスのではなく、カントの「実践」概念と結びつくことが確認された。カントの「形式主義」的倫理学には、幾多の批判が存在するけれども、その誤解については十分に明らかにしておいたつもりである。メンガーの経済学は、つねに主観的契機と客観的契機が平行して二元的に論じられている。その両者が統合されたところに「経済」の姿が見てとれるのである。

結局のところ、メンガーの「欲望」概念は、カントの『実践理性批判』と同一の地平に立つのであり、そのことによって、「本質」という実在論的性格を与えられ、あらゆる認識の統整的原理として「究極的かつ一般的な原因」とする資格を与えられたのである。(1989.4.20)

注(46) ここでの論点に関連して、メンガーとウェーバーの基本的な相違点をあげておく。それは、メンガーの単一の原因への還元という視点にたいして、ウェーバーが多数の要因のそれぞれの自律性を強調したことである。その両者の相違は、おそらく、「神は死んだ」と宣言したニーチェを媒介することによるのではないか。ニーチェにとってカントの『実践理性批判』はもはや意味をもたなくなる。ウェーバーは、ニーチェを媒介にすることによって「神」を客観視し、もはや単一の原因者への還元ではなく、自律的多元論の視点を得たのではないだろうか。

## 参 考 文 献

- [1] Antonelli, E., "Léon Walras et Carl Menger" *Economie Appliquée*. vol. 6 (1953), 269-287.
- [2] Aristotle, *Metaphysica* (出隆訳『形而上学』上・下 岩波文庫)
- [3] 遊部久蔵「メンガー財論の基本問題」『三田学会雑誌』64巻11号(1971) 18-34.
- [4] 東清二郎「メンガー経済学の方法論的性格」『人間科学研究所紀要』2 (1985) 137-191.
- [5] Bloch, H. S. *La Théorie des Besoins de Carl Menger*, (Diss., Paris) 1937.
- [6] Carnap, R., *Philosophical Foundation of Physics*, (Basic Books, N. Y.) 1966. (沢田充茂・中山浩二郎・持丸悦朗訳『物理学の哲学的基礎』岩波書店, 1968)
- [7] Cassirer, E., *Substanzbegriff und Funktionsbegriff* (Verlag von Bruno Cassirer Berlin) 1910. (山本義隆訳『実体概念と関数概念』みすず書房 1979)
- [8] ———, *Zur Logik der Kulturwissenschaften, Fünf Studien*, (Göteborg) 1942. (中村正雄訳『人文科学の論理——五つの試論』創文社, 1975)
- [9] ———, *Kants Leben und Lehre* (Verlag von Bruno Cassirer, Berlin) 1918 (門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房 1986)
- [10] Dobretsberger, J., "Zur Methodenlehre C. Mengers und der Österreichischen Schule" *Zeitschrift für Nationalökonomie* (1949) 78-89.
- [11] Hack, F. "Dr. C. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre" *Zeitschrift für die gesamte Staatwissenschaft*, Bd. XXVIII (1872)
- [12] 林治一『オーストリア学派研究序説』(有斐閣, 東京 1966)
- [13] Hutchison, T. W., "Some Themes from Investigations into Method" in J. R. Hicks and W. Weber (eds) *Carl Menger and the Austrian School of Economics*" (Oxford. 1973) 15-37.
- [14] ———, *The Politics and Philosophy of Economics* (New York, 1981)
- [15] Jaffé, W., *Correspondence of Léon Walras and Related Papers* 3Vols (North-Holland, 1965)
- [16] Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft* (篠田英雄訳『純粹理性批判』岩波文庫)
- [17] ———, *Kritik der praktischen Vernunft* (波多野・宮本・篠田訳『実践理性批判』岩波文庫)
- [18] Kauder, E., *A History of Marginal Utility Theory* (Princeton. 1965)
- [19] ———, "Intellectual and Political Roots of the Older Austrian School" *Zeitschrift für Nationalökonomie* (1995) 411-425.
- [20] ———, "Menger and his Library" 『経済研究』第10巻1号(1959) 58-64.
- [21] ———, *Carl Mengers Zusätze zu "Grundsätze der Volkswirtschaftslehre"* *Bibliothek der Hitotsubashi Universität*. Tokyo (1961)
- [22] 気賀健三「オーストリア学派の経済学方法論」『三田学会雑誌』64巻11号(1971) 1-17.
- [23] 丸山徹『座談経済学』(サイエンス社, 東京 1984)
- [24] ———, 「高橋誠一郎教授の主観的価値学説前史」『三田学会雑誌』78巻4号(1985) 79-99.
- [25] 村田晴夫『管理の哲学』(文眞堂, 東京 1984)
- [26] ———, 「全体性カテゴリーの復権と闘争」『武蔵大学論集』第30巻5・6号(1983) 43-71.
- [27] ———, 「システム論における二つの流れ——カントとホワイトヘッド／バーナード」『武蔵大学論集』第28巻2・3号(1980)
- [28] ———, 「人間学から組織論へ—社会科学の方法に関する諸問題(1)」『武蔵大学論集』第25巻1・2号(1977)
- [29] 持丸悦朗「メンガーの『Bedürfnisの理論』について」『三田学会雑誌』51巻5号(1958) 47-60.
- [30] Menger, C., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* 1Auff. (Wien, 1871) (安井琢磨訳『国民経済



学原理』日本評論社 1973) 2Auf. (1923) (八木紀一郎・中村友太郎・中島芳郎訳『一般理論経済学』みすず書房 1982)

- [31] ———, *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der Politiscen Ökonomie insbesondere* (Leipzig, 1883) (吉田昇三訳『経済学の方法』日本経済評論社, 1986)
- [32] 岡田純一『フランス経済学史研究』(御茶の水書房, 東京, 1982)
- [33] Popper, K. R., *The Poverty of Historicism* (市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社, 1961)
- [34] Schwegler, A., *Geschichte der Philosophie im Umriss* (谷川徹三・松村一人訳『西洋哲学史』上・下, 岩波文庫)
- [35] 杉村広蔵「カール・メンガーの社会科学方法論の研究」『商学研究』(東京商科大学) 第6巻第1号(1926) 21-56
- [36] ———, 『経済哲学の基本問題』(岩波書店, 東京, 1935)
- [37] 左右田喜一郎『経済哲学の諸問題』(佐藤出版部, 東京, 1917)
- [38] ———, 『経済法則の論理的性質』(岩波書店, 東京, 1923)
- [39] ———, 『文化価値と極限概念』(岩波書店, 東京1922)
- [40] 高峰一愚『純粹理性批判入門』(論創社, 東京, 1979)
- [41] 富田重夫『経済学方法論』(日本評論社, 東京, 1961, 増補版 1986)
- [42] ———, 「経済学における精密法則の論理的妥当性と現実適用可能性」『三田学会 雑誌』50巻5号(1957) 28-48.
- [43] 上宮正一郎「メンガーの *Bedurfniss* 論」『国民経済雑誌』128巻2号
- [44] 八木紀一郎『オーストリア経済思想史研究』(名古屋大学出版会, 名古屋 1988)
- [45] 山田雄三(編)『経済学学説全集9』「近代経済学の生成」(河出書房, 東京, 1955)

(慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程)